

**立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
企画研究プロジェクトⅡ（教員・学生参加型） 2022年度研究成果報告書**

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏名
	福祉学科・3年	木下 美裕
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部・教授	西田 恵子
研究課題	檜葉町の震災・復興から学ぶ災害対策と地域福祉の在り方 ～11年目の今、できること～	
研究年度	2022年度	
プロジェクト 分担者	大田璃子 大波さくら 小田嶋奈緒 佐野実紀 猿田衣織 三徳美月 宋戸里帆 村上桃萌 若木広海	

プロジェクトの内容及び成果の概要

1. 本プロジェクトの概略

本プロジェクトは、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせるための地域福祉の実践には何が必要か、地域福祉推進のために必要なことは何かについて、福島県双葉郡檜葉町を実際に訪れ、被災後のコミュニティの変化を含む震災学習を通して学ぶことを目的としている。檜葉町地域包括支援センターの職員の方々並びに地域サロンに参加をしている高齢者の方々との交流や、ならば CANvas への訪問と聴き取りなどを通して学びを深めた。

2. 内容

① 檜葉町地域包括支援センターの職員及び、サロン参加者との交流

地域包括支援センター職員の方々との意見交換会では、東日本大震災の体験や、震災後のコミュニティの再生について専門職の具体的なアプローチと考察を聴き取り、学びを得た。参加した地域サロンでは、以前 Zoom で交流した参加者の方も含め、一緒に昼食作りやボッチャを行うことで交流を深めることができた。

② ならば CANvas への訪問

ならば CANvas や生活圏域のスーパーマーケット、飲食店、医療機関、復興住宅の見学を行うとともに、職員の方から居場所の意義や機能についての話を聞いた。コンパクトタウンとしての役割を理解した一方で、課題を発見することができた。

③ 檜葉町についての事前学習

訪問の企画に先立ち、同町についてメンバーで調べ、情報を共有するとともに、訪問に向けて問題意識を整理、醸成した。

3. 考察

檜葉町を訪れ、専門職の方や地域の方々とは交流したことを通して、住み慣れた地域で安心して暮らすためには、住民同士のつながりを絶やさないと重要であると考えた。震災によって失われたコミュニティを再構築するに当たって、住民から居場所を求める声が多くあったことを聞き、専門職だけでなく住民にとってもつながりが重要視されていると理解した。また、サロン活動を始めたコミュニティづくりは、地域住民にとっての生きがいにも繋がっていると考える。一方で、住民同士のつながりの強さが負の側面にも変わりうるということが考えられる。それゆえ、住民との架け橋としてつながる支援者や、近隣の地域コミュニティとの交流など、適度な距離感を保ちながら、住民同士がつながることが重要であると考えた。今回のプロジェクトを通じて、被災による環境の変化で一層孤立しやすくなる高齢者の他者との関わりの必要や、本人の持っている生活技術をはじめとした様々な能力を生かす意義を具体的に知り理解するとともに、社会福祉士をはじめとした地域福祉に関わる専門職の必要についてもさらに理解を深めることができた。